

本と話題

吉岡吉典著『韓国併合』100年と日本』を読んで

姜徳相

本書は「韓国併合」百年を迎えるに当たって「栄光の明治」とその史観をいまだ清算しないばかりか対韓「帝国意識」の残滓が再生している現実を警鐘を鳴らすべく著者が準備していたいくつかの論文とひとつの遺稿からなる。遺稿といっただけは昨年3月ソウルでの三・一独立運動九〇周年に際しての記念講演録で、その直後の著者の急逝で未完に終わったからである。『韓国併合』100年と日本』との表題をもつ本書が植民地時代への言及がすくないのはそのためである。

「侵略の否定」
丹念にあらう

著者に時間があれば朝鮮史上の三・一運動の意義や、三・一を契機に中

「栄光の明治」史観と 「帝国意識」の再生に警鐘

国を含む東アジアの植民地体制の崩壊、三・一が日本帝国主義滅亡のつまずきの石となったという視角からの各論があった

はずである。予期しない事情により、本書は百年前の「併合条約」が違法か合法か、先行する「保護条約」は有効か無効かをめぐる日韓の歴史認識の対立を軸とするようになったが、著者は戦後の日本が「韓国併合」をいかに正当化するかに狂奔したのか、その根の深さを敗戦必至の45年5月、旧ソ連を仲介とした連合国との和平交渉で北千島はソ連に譲渡しても朝鮮

は「我が方に留保」の提案を紹介している。カイロ宣言などわれ関せずの傍若無人ぶりに驚愕するが、それに次いで日韓国交交渉の二つの妄言がとびだす。久保田代表の「(カイロ宣言に)朝鮮人民の奴隷状態」ということが使われているのは、戦争の興奮した心理状態で書かれたもの。高杉代表の「敗戦でダメになってしまったが、もう二〇年間朝鮮をもつていたら、こんなことにならなかつた」云々でポツダム宣言受諾の意味などどこに忘れたのか、朝鮮支配は侵略でなく植民地支配などな



新日本出版社・2000円

かったとの強弁が続く。以後、著者は日本帝国主義滅亡の現実と乖離したこの妄言の原型はどこにあるのかを明白にするため朝鮮研究を終生の課題とする。赤旗記者時代直接耳にしたことばや国会議事録を丹念にあつめ、神経質に反応する政治家や官僚の「併合条約は対等の立場」「自由意思で結んだ条約」「法的には有効」などの発言をあぶりだし丹念に吟味、三十有余年の歳月をかけて仮面剥ぎを準備する。

「山が動いた」
国会での質問

95年8月15日、植民地支配に対して一歩踏み込んだ謝罪発言をした村山談話と、歴代日本政府が一貫して主張した「対等の立場の併合条約」との

解釈の矛盾をついた著者の10月17日の国会質問は著者の蘊蓄を傾けた本書の白眉となる。応答は筋を追うだけではない。局面ひとつずつの対話情景がかもす「あ・うん」の関係、おちるものがストーンとおちていく展開である。こうして村山首相の「対等平等の立場で結ばれた条約とは私は考えておりません」の答弁が引きだされた。山が動いたのである。日本の痼疾「併合無謬論」を小気味よく論破した著者のジャーナリスト、政治家、歴史家の三つの顔がぼつと浮かぶ瞬間だ。光のあて方が変われば歴史の見方もかわる。証拠と深い推理を駆使した展開にわくわくすると共に読者は著者の心情吐露と出会う。それは植民地支配もたらした極悪と戦後の朝鮮認識が戦前とかわらないことへの強い怒りである。(カン・トクサン 滋賀県立大学名誉教授)